

平成22年度 第1回山梨県考古博物館協議会議事録

- 1 日時 平成22年11月5日(金)午後1時30分～
- 2 場所 考古博物館(風土記の丘研修センター)
- 3 出席者 (敬称略)
 - (委員) 堀内邦満、椎名慎太郎、齊藤洋子、三井久美子、谷口一夫、小川はるみ、鈴木郁子、廣瀬はるみ、輿水均、丹澤恵美子、深沢信吾、八巻良一 12名
 - (事務局) 榊原館長、平賀次長、保坂学芸課長、学芸課員1名、総務課員2名
 - (教育庁) 学術文化財課員2名

4 会議次第

- (1) 開会
- (2) 会長あいさつ
- (3) 議事
- (4) その他
- (5) 閉会

5 会議に付した事案の件名

- (1) 平成22年度考古博物館経過事業について
- (2) 平成22年度考古博物館予定事業について
- (3) 平成23年度第29回特別展について
- (4) その他

6 議事の概要

(委員)

平成21年度は、インフルエンザの影響を受けて学校関係の利用が少なかった。今年度も引き続き小・中・高校への利用の働きかけを行ってほしい。

(委員)

考古博物館は、多様な事業展開を行っているが、これについて意見をいただきたい。

(委員)

平成7年度と平成19年度の学校利用者数が多いが、この要因は何か？

(事務局)

平成7年度は「黄金の都シカン発掘展」、平成19年度は「世界遺産ナスカ展」を特別展として開催した影響であり、突出した実績となっている。

(委員)

入館者が突出して多い年とそうでない年がある。突出した理由を分析して、今後の運営に活かすべきである。

(委員)

いずれも周年事業として、テレビ局とも連携して開催した特別展であったため、通常の年に比べてPR量が極めて多かった。

(事務局)

入館者が多くなるのは、外国の資料を展示する特別展の場合であり、テレビ局との実行委員会形式で開催するため、テレビを通じた宣伝効果が絶大である。また、これらは全国で開催される巡回展であるため、県外からの利用者も多くなる傾向にある。通常の特別展では、予算の制約があり、ここまでの宣伝は難しい状況にある。

(委員)

私の学校でも、授業の一環で考古博物館を利用したことがある。学校の中ではなかなかできない学習や体験をさせてもらった。今後も活用したいので、子供の興味や関心を高める工夫をしてほしい。

(委員)

高校の場合は、訪問する機会をなかなかつくりにくい。学校の行事として予定を組むのは難しいが、文化系の部活動の一環としての利用は今後もあり得るので、このような利用も働きかけたらいいのではないかな。

(委員)

私自身は県立科学館の協議会委員も兼ねている。科学は産業と結びつくので、一般に楽しみやすくリピーターも作りやすい。科学館は実学に近く未来もある。一方、考古は地味なので、リピーターをつくるのがなかなか難しいのではないかな。ただ、本日事務局の説明を聞いて、考古博物館は工夫の余地がないうらいアイデアを出していることが分かった。体験メニューも盛りだくさんで、非常によくやっていると思う。採算を度外視していいのかという問題もあるが、文化のためには県民の一定の負担もやむを得ないのではないかな。

(委員)

ボランティアガイドの経験から述べると、県内の児童・生徒は、自分たちの先祖や歴史にあまり興味がないようだ。学校ではどのように学んでいるのか。まず教える教師に興味があれば、児童・生徒にも伝わらないのではないかな。中には展示を見ない引率の教師も見受けられる。考古博物館は、どの世代にも興味を持てる展示を行うことも必要なのではないかなと思う。

また、毎年違う内容で展示やイベントを実施しているが、リピーターがなかなか育ちにくい状況である。PRのさらなる工夫が必要だと思う。

(委員)

私は東京出身であるが、山梨にこのような施設があるとは知らずに育った。有名な遺跡には人が押し寄せるように、日本人は潜在的に考古学が好きなのだと思う。県立博物館は、日常的に子供に来館してもらう工夫をしているが、考古博物館も子供を取り込む工夫が必要なのではないかな。県立施設なのだから、まず県内の学校に興味を持ってもらえるようPRしたらどうか。

また、「道の駅とよとみ」の利用者が増えているので、考古博物館の目の前を通る道の駅のバス利用者を取り込むことができるのではないかな。ドングリクッキーや古代米を健康食として売り出すなど、大人にもPRできる方策を考えたらどうか。

(委員)

外国人が土偶に関心を持っているという記事を読んだことがある。山梨県にもかなりの数が出土しているはずである。特に山梨の豪華な縄文土器は素晴らしい。しかし、山梨県の人々は、身近にありすぎてこの価値に気付いていないのではないかと思う。今後は、この素晴らしさを色々なかたちで伝えていく必要があるのではないだろうか。

県内の市町村は非常に厳しい財政状況の中でボランティアまで活用して発掘作業をしているが、この成果を展示する場として考古博物館の特別展があると思う。市町村単独では消えていく遺跡の保存は困難になっており、展示施設がなければ、発掘した成果がその地域の住民にも伝わらない。考古博物館は、地域性をもっとPRして、市町村を補完すべき役割があるのではないか。また、市町村の発掘関係の予算が決して無駄になっていないこともアピールできる。

(委員)

甲府市の上石田遺跡で発掘された様々な出土品が、すぐに展示されなかったことがある。

各地域で身近に発掘された出土品は、すぐに公開展示されるべきであり、このようなものを考古博物館で取り上げてほしいと思う。

夏に孫と来館した際、拓本をしたり、パズルをしたり、子供も楽しめる工夫がされていると感じた。イベントも多様で、考古博物館の職員もよく考えていると思う。

曾根丘陵公園は、古墳公園として印象に残る施設であるが、古墳だけを見学して帰る人も見受けられる。そこで、古墳の近辺に、考古博物館で今どのようなイベントを行っているのか案内する看板などを設置してPRしたらどうか。

(委員)

小学生の研究発表を全国展開してみたらどうか。このような情報発信も必要であると思う。

路線バスを利用する来館者もいると思うが、1日に4便しかない。また、バス利用という点でいうと、県立美術館の場合は、甲府駅にバスの案内とセットですぐ分かるようなインフォメーションがある。考古博物館もこの点を改善することができないものか。

(委員)

路線バスの問題は長年の懸案事項であるが、事務局はどのように考えているのか。

(事務局)

公共交通はどこも赤字路線をかかえ経営が難しい現状がある。乗客もほとんどいないのに、逆に1日4便でも路線が維持されているのは奇跡に近いのではないかと思う。県としても自家用車を利用できない方々を何とか支援したいと考えているが、税金を投入して運営を支えることは不可能であり、難しい状況である。

(委員)

路線バスの増便は、実際のところ困難ではないか。例えば史跡文化財セミナーは、参加者にどのように集合してもらっているのか。

(事務局)

参加者各自の車で現地集合していただいている。

(委員)

特別展は、開催期間をもう少し長くした方がいいのではないか。

(事務局)

国宝を展示用に借りる場合、借用期間が60日という限度がある。

また、夏場の夜間は空調を夜間止めてしまうので、展示資料によっては影響を受けることもあり、特別展の開催は、秋季に限られてしまうのが現状である。

(委員)

特別展もいいのだが、地元の出土品が年間を通じて常時展示されないのも問題である。

展示スペースが限られるため、特別展期間中は、常設展示のスペースが三分の一に追いやられてしまっている。地元の出土品も長期に展示して広く知ってもらいたいので、展示室がもっと広くなれないものか。建替えが必要である。

来館者も自身の地元のもものが展示されていると、愛着を感じてうれしそうな顔をしてくれるので、展示の際、出土した市町村の大字レベルまで表記すれば、より身近に感じられて喜んでもらえるのではないか。

(委員)

もっと詳細な出土地点などの情報を表記したらどうか。

(委員)

実際、地元の出土品と分かると、子供たちの関心の示し方が違うようだ。子供たちも自分に関係のあるものには興味を持つことができる。学校でもこういう教育をしていきたい。

(委員)

展示している縄文土器には、海外にも貸し出して世界中を回っているものもある。そういう点も十分にPRしてもらいたい。